

大学院派遣研修での研究内容の概要

所 属 校	世田谷区立松沢小学校	氏 名	大 湊 勝 弘
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	音楽教育
研究テーマ	竹を音素材とした東南アジアの音楽の教材化と指導法の研究 —素材を生かした楽器作り・音楽づくりの実践を通して—		

1 本研究の目的

本研究の目的は、東南アジアの音楽を通して、竹を音素材とした音楽の教材化と指導法について明らかにすることである。このことを以下の2つの視点から検証した。

- 竹の素材を生かした楽器作り・音楽づくりの学習を通して、竹を音素材とした音楽の教材化と指導法を理論研究、及び実践研究から明らかにする。
- 竹を音素材とした東南アジアの音楽、及びそれをもとにした創造的な音楽活動が、子どもの音楽観の拡大にとって有効であることを明らかにする。

2 研究内容

研究の主な内容は、次の3点である。

- 東南アジアの音楽の研究を通してその多様な文化、生活風習、音楽の種類・様態を概観し、竹を音素材とした東南アジアの音楽の指導に欠かせない基本的枠組みを明らかにする。
- 竹を音素材とした東南アジアの音楽を通して、子どもの音楽観の変容を授業実践から明らかにする。
- 竹を音素材とした東南アジアの音楽をもとに教材化を図り、竹素材のよさを生かした楽器作りとそれを活用した音楽づくりによる指導法の研究を行う。

(1) 研究の概要—各章の内容—

第1章では、諸民族の音楽の教育的な意義を、研究者の論や学習指導要領、各教科書などから明らかにした。諸民族の音楽の教育的意義については、様々な研究者による論においてその重要性が述べられている。また、平成元年及び平成11年度の学習指導要領、及び教科書の内容（いずれも小・中学校）からは、小学校の第6学年ではアジアを中心とする諸民族の音楽が、中学校では世界の諸民族の音楽が広く取り上げられていることが分かり、諸民族の音楽を学ぶ意義と大切さが理解できた。

第2章では、東南アジア諸国の社会的文化的な背景、楽器や音楽について示すとともに、諸民族の生活と竹の楽器との関係、竹の生態とその社会的な役割などについて文献から考察した。主な内容は、

①東南アジアの音楽的な諸要素の概要 ②竹の様々な種類と楽器としての素材 ③竹の生態と社会的な役割—儀式や儀礼との関係 ④楽器学と竹の楽器との関連 である。

例えば、④では、竹の楽器は、切ったり削ったりしながら竹素材を減少させて製作するものであるが、楽器学には、この「削る、切る、割る、穴を穿つ等、材料を減少させながら行う作業」を、第1次加工という言い方をあてる論が見られる。また楽器の音の出し方や起振法、材質や材料との関係などについて述べた。

第3章では、先行実践研究を網羅的に収集しその分析を試みた結果、おおよそ次の6分野に分けることができる考え、それぞれ実践事例から考察した。

- ① 社会的文化的な背景との関連による学習（民族・言語・生活風習との関連）
- ② 学校の行事との関連（運動会における竹太鼓の演奏、竹楽器を使った音楽会での演奏）
- ③ 器楽との関連（リコーダー、木琴、打楽器、鍵盤楽器等との組み合わせ）
- ④ 他の芸能・音楽との関連（舞踊、人形劇の伴奏、歌唱、バンブーダンスなど）
- ⑤ 環境音との融合（竹林の音とのコラボレーション、サウンドスケープなど）

⑥ 伝統音楽、地域の祭の曲、現代音楽との関連（「〇〇ばやし」などと竹の楽器との関連）

これらの考察の結果、竹楽器の音そのものの質と、竹楽器の組合せによる響きに視点をあてた実践研究が少ないことを指摘し、自身の竹楽器作り・及び音楽づくりの構想を示した。

内容は、①竹楽器のいろいろな組合せ ②楽器の奏法の工夫 ③音楽的な要素の変化や組合せ ④複数学年にわたる実践の計画 である。

第4章ならびに**第5章**では、第3章の課題を受け、実践にあたっての教材と教材化の捉え方、及び指導法について構想図を用いて提案し、第4学年ならびに第6学年での検証授業を通してこれを実証した。

まず、本研究における「教材」の概念を第1次教材（東南アジアの楽器や音楽、竹の種類とその特徴）と第2次教材（竹の楽器及びそれを活用して創造した音楽など）に分類・定義した。「教材化」については、東南アジアの音楽、竹の楽器を基盤に、竹素材を加工して楽器を作り音楽をつくる一連の過程と捉えることとした。

「指導法」では、①指導の流れと学習過程 ②表現と鑑賞の関連 ③素材の精選と楽器の音色の追求 ④楽器の組合せの工夫 ⑤授業の進め方 の5つの視点から授業を構成した。

(2) 検証授業の結果と考察

検証授業の結果と考察を、以下4つの点にまとめた。

①竹楽器作り…初めての経験から作業に大変な様子も見られたが、音が出たときの喜びは大きいものがあった。**②楽器の音色と響き—奏法との関連**…素材の吟味、マレットの固さや打つ場所の選定、またスナップをきかせて打つようにすることにより、響きのある音が生まれる。

③音楽づくり (ア) 同種類楽器の組合せ…インターロッキングの手法を取り入れたことで、スムーズにリズムづくりができた。また同じ音色のため合わせやすく、演奏にまとまりが感じられた。

(イ) 異種類楽器の組合せ…第4学年と第6学年では楽器の種類や人数構成に変化をもたせた。同じ楽器が多いほど音色や響きにまとまりが感じられ、種類が多いほど全体の響きが華やかな演奏となった。一方で、第4学年では曲の終わり方に課題が残るグループも見られた。**(ウ) 鑑賞曲と子どものつくる音楽との関連**…東南アジアの音楽の鑑賞が音楽づくりに役立った。第6学年では約1/3の子どもが曲の構成に生かすことができた。**④子どもの音楽観の拡大**…「音階の違い」「地域・気候の違いと楽器の特徴」「竹素材の厳密さ」「音の出し方の多様さ」などについて、これまで体験したことのない新たな音楽観の広がりを見ることができた。

3 研究成果と課題

これらの結果と考察から、以下のことが明らかとなった。

- 竹を音素材とした東南アジアの音楽の学習では、表現と鑑賞を関連させた指導、楽器作り・音楽づくりという創造的な活動が、子どもの音楽観の拡大に大きな効果をもたらす。
- 竹の楽器作りでは、音が出たときの喜び、満足感に大きな成果を得ることができる。
- 竹の楽器による音楽づくりでは、インターロッキングの手法を取り入れた活動が有効であり、楽器の組合せによって様々な響きの変化を感じ取ることができる。
- これらの活動において最も重要な点は、竹素材の素朴な音、明るい響きなど竹特有の音の響きを感じ取ることである。そのためには楽器の奏法や撥の選定の仕方など、様々な要因が関連していることが分かった。また竹素材のよさも重要な視点であることから、よい音とは、人的物的な相互作用により生まれるものであることが理解できた。

なお、今後の課題としては、以下の点が挙げられる。

- 竹楽器の種類を幅を広げたり既存の楽器を加えたりして、多様な形態のアンサンブルによる指導法を確立すること
- 東南アジア諸国を含め、他のアジア圏の諸民族の音楽を学ぶとともに、多様な音源や視聴覚資料などの教材の収集・整備とその活用を行うこと

大学院派遣研修成果活用状況

所 属 校	世田谷区立松沢小学校	氏 名	大 湊 勝 弘																	
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	音楽教育																	
研究テーマ	竹を音素材とした東南アジアの音楽の教材化と指導法の研究 —素材を生かした楽器作り・音楽づくりの実践を通して—																			
1	<p>大学院での成果を生かし、以下の実践を行った。</p> <p>(1) 校内での成果発表（平成 17 年 3 月 23 日）</p> <p>(2) 校内での授業実践（平成 17 年 6 月 23 日～7 月 12 日）</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>(1) 大学院修了に当たり、校内にて研究成果を発表した。全職員に資料を配付し、プレゼンテーションを行う。発表の後、質疑応答を含めた協議会を実施した。</p> <p>(2) 研究テーマのもと、昨年度実践した内容について課題を検討し、授業実践を行った。</p> <p style="text-align: center;">＜授業の主な内容＞</p> <p>①題材名…竹楽器作りと音楽づくりを楽しもう</p> <p>②実施学年…第 5 学年 全 3 学級（昨年度実践した第 4 学年）</p> <p>③総合的な学習の時間、音楽科の授業…全 7 時間（東南アジアの音楽を含む）</p> <p>④楽器の種類とアンサンブル…全 4 種類の楽器作成、及び同種楽器によるアンサンブルを行う。</p> <p>⑤指導者…音楽（報告者）、及び図工専科</p> <p>⑥概要…下記「3 成果を生かした研究授業等」に記す。</p>																			
2	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 40%;">発表研修会名等</th> <th style="width: 20%;">実施日</th> <th style="width: 20%;">参加対象者</th> <th style="width: 20%;">参加数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>世田谷区小学校教育研究会 音楽部会</td> <td>平成 17 年 4 月 13 日</td> <td>区内小学校音楽部員他</td> <td>約 50 名</td> </tr> <tr> <td>東洋音楽学会 東日本支部</td> <td>平成 17 年 3 月 19 日</td> <td>東洋音楽学会会員他</td> <td>約 30 名</td> </tr> <tr> <td>山梨県総合教育センター夏期研修会（打楽器実技研修会）</td> <td>平成 17 年 7 月 27 日</td> <td>山梨全県の小・中・高校の音楽科担当教諭</td> <td>約 70 名</td> </tr> </tbody> </table> <p>○ 世小研音楽部会（於：区立千歳台小学）にて研究の概要（目的・内容—各章について・検証授業—成果と課題）について資料を配付し、プレゼンテーションを行った。音楽科においては様々な学習領域があるが、竹を素材とした楽器作り・音楽づくりの実践は世界の音楽、或いは創作的な学習の一事例として有効である。</p> <p>○ 東洋音楽学会（於：東京芸術大学）にて修士論文の発表を行った。学術的な発表の多い中、音楽科教育の実践を主体とした内容は学術研究者に教育現場の理解とその実態を示すことができたのではないかと考える。</p> <p>○ 山梨県総合教育センターの研修会（打楽器実技研修会）…山梨全県の小・中・高校の音楽科担当教諭対象の打楽器実技研修会にて、竹の楽器の創作・音楽づくりの一端を紹介する。併せて受講者に竹楽器を使っの簡単なアンサンブルを体験してもらった。</p>				発表研修会名等	実施日	参加対象者	参加数	世田谷区小学校教育研究会 音楽部会	平成 17 年 4 月 13 日	区内小学校音楽部員他	約 50 名	東洋音楽学会 東日本支部	平成 17 年 3 月 19 日	東洋音楽学会会員他	約 30 名	山梨県総合教育センター夏期研修会（打楽器実技研修会）	平成 17 年 7 月 27 日	山梨全県の小・中・高校の音楽科担当教諭	約 70 名
発表研修会名等	実施日	参加対象者	参加数																	
世田谷区小学校教育研究会 音楽部会	平成 17 年 4 月 13 日	区内小学校音楽部員他	約 50 名																	
東洋音楽学会 東日本支部	平成 17 年 3 月 19 日	東洋音楽学会会員他	約 30 名																	
山梨県総合教育センター夏期研修会（打楽器実技研修会）	平成 17 年 7 月 27 日	山梨全県の小・中・高校の音楽科担当教諭	約 70 名																	
委員会・研修会での成果活用																				

<p>3</p> <p>成果を生かした研究授業等</p>	<p>竹楽器作りと竹の音楽づくり—その実践</p> <p>1, 授業の概要 自分が選んだ竹楽器を製作し、楽器ごとにグループを組んでアンサンブルを楽しむ。</p> <p>2, 学習の設定</p> <p>(1) 学 年 第5学年 全3学級 (2) 期 日 6月23日より7月12日まで (3) 内 容 4種類の竹楽器作りと音楽づくり (4) 時間設定 竹楽器作り(総合4時間) 音楽づくり(音楽2時間) ※他に東南アジアの音楽(1時間) (5) 指 導 者 音楽・図工専科、各学級担任 (6) 竹の購入及び準備 「特色ある教育活動」及び「総合的な学習」の一環で予算を計上した。 また、地域の商店街で使用した七夕の竹を活用した。</p> <p>3, 授業の内容 今年度は、昨年第4学年で行った経験を生かし、引き続き第5学年で実践することとした。なお、楽器については、昨年度製作したバリンビンをはじめ、ハンドマリンバー〔新〕、マラカギロ〔新〕、竹ボラの4種類を製作した。なお、授業のまとめとして、ガムラン、ケチャなどの音楽も聴いたり体験したりした。</p> <p>4, 学習計画</p> <p><u>【第1次(4時間)】</u> ○製作する竹楽器を知り、楽器を作る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽器の種類とその機能を知る(バリンビン、マラカギロ、ハンドマリンバー、竹ボラ)。 ・楽器のグループごとに分かれて製作の詳しい内容を知る。 ・各楽器の製作をする(その過程においては部分的な修正を行ったり筒を取り替えたりする)。 ・撥などを使って音を確かめたり響きのよい場所を探したりする。 <p><u>【第2次(2時間)】</u> ○竹楽器による即興的な音づくりのアンサンブルを楽しむ</p> <p><音づくりのグループの活動の流れ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・トガトンやバリンビンの映像を視聴し、その機能と役割を知る。 ・簡単なリズムを手拍子や楽器で模倣する(インターロッキングの手法)。 ・楽器ごとにグループを組み、リズムや強弱、速度などを工夫する。 ・リズムアンサンブルを発表し合い、互いの表現を認め合う。 <p>※この後、東南アジアの音楽の学習(1時間)を実施した。</p> <p>5, 成果と課題 楽器作りは全体的に昨年度より容易にできた子どもが多い。また異なる楽器を作製したことでも意欲も高まった。音楽づくりでは、昨年度よりも「音の響きを感じ取って演奏できた」「リズムもいろいろ工夫できた」と、経験の成果が見られる。一方で、「練習ではうまくいったが本番で失敗した」など、時間的な面も含めて、楽器の組合せ方や練習の過程での練り上げが課題となった。</p>
<p>4</p> <p>今後の活用計画</p>	<p>今後の活用について、以下のように考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○校舎改築に伴い、仮設校舎での対応を工夫する。図工室及び図工専科との連携、竹材の置き場の検討、資料の保管活用、総合との関連の計画実施。 ○竹楽器に加え、他の打楽器(既存の木琴、膜面打楽器等)を組み合わせる即興的なアンサンブルを行う。その際、学習形態をグループ・全体の視点から見直す。 ○児童の実態を考慮し、東南アジア及びアジア広域にわたる諸民族の音楽について学習に取り入れる。また、授業の実施計画・資料の収集等も検討する。 ○論文をもとに製作した研究冊子について指導助言を仰ぎ、今後の研究に役立てる。

実施日	平成17年6月23日～7月12日
場 所	世田谷区立松沢小学校
対象児童	第5学年1～3組
指導者	音楽科 大湊 勝弘 図工科 小野 宏子

1. 題材名 「竹の楽器作りと音楽づくりを楽しもう」

(1) 題材についてー

昨年度は、大学院での実践研究を検証するために2学年（第4学年と第6学年）に渡って行ったが、今年度は、その経験を生かし、2年目ではどのような展開ができるであろうかということ念頭において実践する。実施学年は、第5学年（昨年度の第4学年）。

(2) 楽器作り

楽器については、昨年度製作したバリンビンをはじめ、新しい楽器では、ハンドマリンバー、マラカギロ（オリジナル）、竹ボラを製作する。

昨年度の子どもの感想からは、「竹を切るのが難しかった」「思ったより時間がかかる」などの子どもの様子が見られたが、今年度はその経験を生かし、ある程度加工は容易にできるのではないかと考える。

ハンドマリンバーについては、バンブーオーケストラ（竹楽器のオーケストラ）で使用している楽器をもとに製作することとした。形状はトガトンのように片方の筒の節を残して2本のスリットを入れ、音が鳴る楽器である。マラカギロは、文字通りマラカスとギロの機能を持ち合わせたもので、2つの音が楽しめるものである。

なお、楽器作りには昨年度同様、図工専科も協同で行った。

(3) 音楽づくり

音楽づくりでは時間設定の関係もあり、同種類楽器のみで行う。トガトンのインターロッキングの手法を中心として、3部構成を中心とした昨年度の経験がどのように生きるか、実証したい。

2. 主な学習内容

- (1) 竹楽器を主体とした東南アジアの音楽を聴いたり演奏したりして、諸民族の音楽に親しむ。
- (2) 自ら選んだ竹の楽器作りとそれによる音楽づくりを楽しむ。
- (3) 竹楽器のアンサンブルを発表し合い、多様な音色や響き、その奏法を感じ取る。

3, 授業の概要

- (1) 時間設定 竹楽器作り (総合 全4時間)
音楽づくり (音楽 全2時間) 他に東南アジアの音楽学習 (1時間)
- (2) 指導者 音楽・図工専科
- (3) 竹の準備 竹専門店より晒竹を購入。孟宗竹は商店街の七夕の飾り竹を使用。
- (4) 活動の場所 図工室、音楽室

4, 教材及び資料

- (1) 映像資料…DVD「竹の響き」『小泉文夫の遺産』（第1回アジア伝統芸能の交流より）
KICE 75 キングレコード 2002 他

○トガトン (スタンピングチューブ) …フィリピンのカリンガ族が演奏する竹の楽器。6人一組で構成され、それぞれが長さの異なる竹筒を持ち、石や煉瓦に打ちつける。インターロッキング (入れ子式) のリズムを様々な組合せることにより、音程差などからおもしろい竹筒の響きが得られる。


○バリンビン…トガトンと同じくフィリピンのカリンガ族が演奏する竹の楽器で、細めの竹筒に縦に2本の切れ目を入れる。


片手に持った筒をもう一方の手に打ちつけることにより音が鳴り、インターロッキングのリズムを組み合わせた変化させたりして演奏する。

(2) 竹楽器図

楽器図をもとに作業の仕方を説明する。以下は、2つの楽器の見取り図の例である。

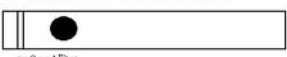
マラカギロを作ろう (ギロとマラカスの両方が楽しめる！)

- 1, つつに、えんぴつで印を入れる


みぞの間かくが広い音が響い
みぞの間かくがせまいと、音が響かない
※幅(はば)をかえてもおもしろい!
- 2, つつの長さの半分くらいにしるしをつけて、みぞを切る



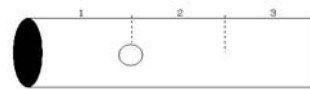

みぞ (削いでいる方)
線をいれてふたをする
- 3, 開いている一方の大きさの型紙(厚紙)を切る。
- 4, つつに粒を入れて、型紙のふたをして完成!


竹ボウを作ろう

- 1, 一方のふしを残して切り、歌口に印を付ける (ペン、メジャー)
- 2, 歌口の印をドリルで穴をあける


2~4P

ハンドマリンバーを作ろう

- 1, 開いてる口を3等分したところに、線をえんぴつで書く

- 2, つつを3等分(よこ)したところに、○の印をえんぴつで書く

- 2, ○の印から、はしの方に2本の線を引き、線にそって切り出して、切り落とす。これができたらウラ側も切る。



線に沿って切る
線に沿って切る
- 3, 時間があったら…つつに、たての線を書き入れる


切り落とした部分
線にそって刻みを入れる。切りすぎると穴が空いてしまうので注意。

5. 評価規準

	ア) 音楽への関心・意欲・態度	イ) 音楽的な感受や表現の工夫	ウ) 表現の技能	エ) 鑑賞の能力
題材の評価規準	いろいろな竹の楽器に関心を持ち、進んで楽器作りや音楽づくりに取り組もうとしている。	竹素材の加工や音の出し方を工夫して、響きや効果的な音を出している。	リズム、強弱、構成を工夫して、互いの音を聴きながら拍到合うリズムを演奏している。	竹の響きや奏法を感じ取り、竹素材の組合せによる演奏のよさを感じ取って聴く。
創作	○	○	○	
鑑賞				○
学習活動における具体的評価規準	①楽器の作り方について関心を持ち、自分なりのイメージをもって取り組もうとしている。	①竹の切り方や音の響きを確かめながら竹楽器を作っている。 ②竹素材のよさを生かして音の出し方を工夫したり、響きを感じ取ったりしている。 ③リズムを感じ取り、音色の多様さを感じ取って音楽づくりを工夫している。	①拍を感じ取ったり響きのある音色を生かしたりして、竹楽器を演奏している。	①奏法の違いや音色の多様さを感じ取って聴く。

6. 指導計画

	○学習内容 ・ 学習活動	□教師の留意点 ★評価（評価方法）
＜第1次＞ 製作する楽器に関心を持ち、竹素材の加工を工夫して楽器を作る		
第 1 次 1 2 3 4 時 間	<p style="text-align: center;">全学級共通項目</p> <p>○竹の楽器を知る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 楽器の種類とその機能を知る。 ・ 楽器のグループごとに分かれて、製作の詳しい内容を知る。 <p>○竹楽器を製作する。</p> <div style="text-align: center;">  </div>	<p>□楽器の種類を解説図によって知らせ、製作の概略を説明する。</p> <p>□音楽専科、図工専科の分担によって楽器の説明を行い、それぞれの製作の指導に当たる。</p> <p>★楽器の作り方について関心を持ち、自分なりのイメージをもって取り組もうとしている。ア－①【態度観察】</p> <p>★竹の切り方や音の響きを確かめながら竹楽器を作っている。イ－①【態度観察】</p>
	<p>① バリンビンは、昨年度も製作しており、手順は同じ。経験のない子どもを中心に製作する。</p> <p>② マラカギロは、マラカスとギロの2つの機能を持ち合わせた楽器である。竹の表面にギロ状の刻みを入れ、筒の中に hidroboide を入れて蓋をして作る。</p> <p>③ ハンドマリンバーは、手マリンバ（バンブーオーケストラによる）をある程度模倣したもので、比較的長い筒を用いている。製作にあたっては改良を加えてギロの刻みを入れてもよい。</p> <p>④ 竹ボラは楽器の解説にもまま見られる楽器である。太めの筒に吹き口を開け、息を吹き込む簡単な横笛である。</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 素材を切ったり穴を開けたりして楽器を製作する。 ・ 部分的な修正を行い、ひびが入った場合は筒を取り替える。 ・ 音を確かめる、色を塗るなどの作業を進める。 ・ 音楽づくりについて説明を聞く。 	<p>□手を切らないよう慎重に進めるようにする。危ない作業（ドリルによる穴開け）等は教師が付いて指導或いは進めるようにする。</p> <p>□時々音を出して確かめるようにする。</p> <p>★竹素材のよさを生かして音の出し方を工夫したり、響きを感じ取ったりしている。イ－②【態度観察】</p>

<第2次> 竹楽器の音の出し方や組合せ方を工夫し、即興的なアンサンブルをする

<p>第 2 次 5 6 時 間</p>	<p>○竹楽器の映像から、楽器について理解する。 ・バリンビン、トガトンの映像から、音色や響き、奏法などを理解する。 ○楽器を組み合わせてアンサンブルをする。 ◇音づくりのグループの活動の流れ ↓</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>① 楽器ごとにグループを組む。 ② 簡単なリズムを手拍子や楽器で模倣する。 ③ グループごとにリズムを工夫したりインターロッキングを取り入れたりしながら音楽づくりを行う。 ④ 速さや強弱などを工夫する。</p> </div> <p>・自分たちのリズムアンサンブルを発表する。</p>	<p>□映像に着目させ、音色、響き、奏法などを意識させる。 ★奏法の違いや音色の多様さを感じ取って聴く。エー①【表情観察・発言観察】</p> <p>□活動に必要な資料を用意する。 □資料を基に、手拍子でインターロッキングのリズムを打ち合わせる。 □個々を見回り叩き方を指導したり、叩く場所を示したりして助言する。 ★リズムを感じ取り、音色の多様さを感じ取って音楽づくりを工夫している。 イー③【表現観察】 □グループ内の竹筒の音程差に気を付けるようにする。また、できたグループに発表させる。 ★拍を感じ取ったり響きのある音色を生かしたりして、竹楽器を演奏している。 ウー①【演奏観察】</p>
---	--	--

■アンサンブルのリズム表 (参考資料)

島崎篤子・加藤富美子『授業のための日本の音楽・世界の音楽』東京：音楽之友社 1999

東洋音楽学会東日本支部第18回定例研究会発表資料

於：東京芸術大学音楽学部

竹を音素材とした東南アジアの音楽の教材化と指導法の研究

—素材を生かした楽器作り・音楽づくりの実践を通して—

東京学芸大学大学院（世田谷区立松沢小学校 主幹）

大湊 勝弘

1 研究の目的

本研究の目的は、東南アジアの音楽を通して、竹を音素材とした音楽の教材化と指導法について明らかにすることである。このことを以下の2つの視点から検証した。

- (1) 竹の素材を生かした楽器作り・音楽づくりの学習を通して、竹を音素材とした音楽の教材化と指導法を理論研究、及び実践研究から明らかにする。
- (2) 竹を音素材とした東南アジアの音楽、及びそれをもとにした創造的な音楽活動が子どもの音楽観の拡大にとって有効であることを明らかにする。

2 研究の内容

研究の主な内容は、次の3点である。

- (1) 東南アジアの音楽の研究を通して、その多様な文化、生活風習、音楽の種類・様態を概観し、竹を音素材とした東南アジアの音楽の指導に欠かせない基本的枠組みを明らかにする。
- (2) 竹を音素材とした東南アジアの音楽を通して、子どもの音楽観の変容を授業実践から明らかにする。
- (3) 竹を音素材とした東南アジアの音楽をもとに教材化を図り、竹素材のよさを生かした楽器作りとそれを活用した音楽づくりによる指導法の研究を行う。

3 研究の概要

序 章…本研究の概要（研究の動機、目的、内容、対象範囲、論文の構成）

第1章…諸民族の音楽の教育的意義（研究者の論、学習指導要領、教科書）、民族音楽の定義

第2章…東南アジア諸国の社会的文化的な背景、楽器・音楽についての例示、諸民族の生活と竹の楽器との関係、竹の生態とその社会的な役割

第3章…先行実践研究の収集と分析→竹楽器の音質、竹楽器の組合せによる響きに視点をあてた実践研究が少ない→自身の竹楽器作り・及び音楽づくりの構想を図などを用いて提示

第4章・第5章…実践への教材化とその捉え方、及び指導法についての提案。第4学年ならびに第6学年での検証授業の結果と考察

終 章…研究のまとめと今後の課題

4 各章の内容

第1章…諸民族の音楽の教育的な意義を研究者の論や学習指導要領、各教科書などから明らかにし、世界の様々な音楽への視野を広げることの重要性をまとめた。諸民族の音楽教育

の意義については、研究者による論やこれまで西洋音楽に比重がおかれた反省もふまえて、幅広い音楽観の育成が求められている。また、平成元年及び11年度の学習指導要領をもとに小・中学校の内容を比較・考察した結果、諸民族の音楽の大切さが求められていることが理解できた。さらに、各教科書会社の諸民族の音楽の内容を網羅したことから、小学校の第5学年では日本の音楽を中心に、第6学年ではアジアを中心とする音楽が取り上げられていること、中学校ではさらに幅広く世界の諸民族の音楽が取り上げられていることが分かった。

第2章…東南アジア諸国の社会的文化的な背景、楽器や音楽について例示するとともに、諸民族の生活と竹の楽器との関係、竹の生態とその社会的な役割などについて考察した。

○東南アジアの音楽の特徴…「音階」「リズム・拍子」「演奏様式」「即興演奏」「演奏形態」「楽器の分類」「楽器の機能」の7項目についてその概略を考察し、竹楽器における関連を述べた。

○竹の様々な種類の分析と、楽器としての素材…日本と東南アジアの竹についての役割及び違いについて述べた。竹楽器を本研究に取り上げた理由として、子どもたちにとって身近であること、楽器としての加工が比較的容易であること、多くの労を要せず音が出しやすいことなどが挙げられる。さらに素材の特徴については、・筒状であること、・たたくと良い響きが出る素材であること、・非常に弾力性がある素材であることなどが理解できた。

○竹の生態と社会的な役割…儀式や儀礼との関係から主に精霊信仰及び豊作の儀式と竹楽器との関わりについて、インドネシアやフィリピンなどの地域から、いくつかの例を抜粋して述べたが、竹と生活との密接な関係が分かった。

○楽器学と竹の楽器…竹の楽器は、切ったり削ったりしながら竹素材を減少させて製作するものであるが、楽器学には、この「削る、切る、割る、穴を穿つ等、材料を減少させながら行う作業」を、第1次加工という言い方をあてる論が見られる。他には楽器の音の出し方や起振法などについて述べた。

第3章…先行実践研究を網羅的に収集しその分析を試みた結果、おおよそ次の6分野に分けることができる。分析資料は主に、教育音楽（音楽之友社）の記事、及びその他の研究報告書や論文、教育現場の訪問などによる。また他に大学の研究論文より示唆を得た。

1, 社会的文化的な背景との関連による学習	・風土・民族・言語・生活風習との関連、及び「総合的な学習」の一環としてまた、他の活動と組み合わせて（道具、住居、フィリピンの暮らし、など）の実践。
2, 学校の行事との関連	・運動会で竹の太鼓の演奏（種目の一つ）、竹楽器を使った音楽会での発表。
3, 器楽との関連	・リコーダー、木琴、打楽器、ピアノ、鍵盤楽器等との組み合わせによるアンサンブル。既存の楽曲（打楽器アンサンブル）を活用した学習。
4, 他の芸能・音楽との関連	・舞踊、人形劇（ワヤン）の伴奏音楽、歌唱、バンブーダンス、ジェゴグ、ガムラン、ケチャ等との関連。
5, 環境音との融合	・竹林の音とのコラボレーション、サウンドスケープ、即興的な音作り、竹林にいろいろな楽器を持ち込んでのアンサンブル活動。
6, 伝統音楽、地域の祭の曲、現代音楽との関連	・「〇〇ばやし」などと竹の楽器との関連、地・表のリズム、雅楽、現代音楽の聴取・関連。

これらの考察の結果、以下の問題の所在が明らかになった。

竹楽器の音そのものの質と、竹楽器の組合せによる響きに視点をあてた実践研究が少ないことを指摘し、自身の竹楽器作り・及び音楽づくりの構想を示した。

内容は、①竹楽器のいろいろな組合せ ②楽器の奏法の工夫 ③音楽的な要素の変化や組合せ ④複数学年にわたる実践 について研究を進めた。

本研究では、竹素材の音質を大切にした楽器作り（トガトン、バリンビン、レインスティックなど）、及び東南アジアの竹の音楽をもとにした音楽づくりを行う。ここでは子どもたちが自由な発想を取り入れながらリズムをつくったり、音楽的な要素を組合せたりして自由に音楽をつくることを基盤とする。実施学年は、2 学年（第 4・6 学年）で行い、実践を通して内容を検証したり違いを示したりして新たな音楽観の広がりについて明らかにする。

第 4 章ならびに**第 5 章**では、第 3 章の課題を受け、実践にあたっての教材化とその捉え方、及び指導法について構成図を用いて提案し、第 4 学年ならびに第 6 学年での検証授業を通してこれを実証した。

○**教材と教材化**…本研究における教材の概念を、様々な基礎研究から「竹を音素材とした楽器、またそれを基にした音楽など」を教材とする。また、教材化を「東南アジアの音楽、竹の楽器を基盤に、竹素材を加工して楽器を作り音楽をつくる一連の過程の教授・学習の過程」と位置付ける。

【第 1 次教材】…東南アジアの国の楽器による音楽をはじめ、竹の種類とその植生や特徴なども含む。

【第 2 次教材】…竹の素材から製作した楽器及び、それを活用して創造した音、音楽などという。

○**指導法の 5 つの視点**…指導法については、次の視点をもとに授業を構成した。

①指導の概要と学習過程

第 4 学年と第 6 学年の学習指導計画を立てて進める。先行研究では 2 学年で取り組んでいる例がないことと、その違いを検証することに意義があると考え。学習内容とその過程は、○竹やその楽器について知る ○楽器を作る ○演奏を聴き曲想を感じ取る ○自分たちでリズムや音楽をつくる ○発表してまとめる である。

②表現と鑑賞の関連

東南アジアの音楽を聴いたり竹楽器の映像を視聴したりして、楽曲構成や楽器の音色、その組合せによる響きなどを感受する。そして感じ取った音楽的な要素や構成を基に、竹楽器を通して音楽づくりを行う。

③素材の精選と楽器の音色の追求 ー作るー

明るい響きや音色が得られるように竹素材について吟味したり、音色や響きを生かすためにマレットの選定や響く場所の選定をしたりする。またそのために、正しい奏法を指導し習得できるようにする。授業では常に音から始まり音で帰結するような流れを構築し、「よい音」を意識しながら進めるようにする。

④楽器の組合せの工夫 ー奏でるー

楽器をア) 同種類の楽器群 イ) 異種類の楽器群に分け、それぞれの楽器群でリズムアン

サンプルを行う。ア) では数人によるバリンビン、またはスリットドラム同士などの組合せで、イ) ではそれぞれ種類の異なる竹楽器群を組み合わせる異なった響きや音色を感じ取りながら新しい音楽を創っていく。その際、グループの構成人数に差をもたせたり楽器の組合せの種類に変化をもたせたりして、音色や響き、活動の様子などの相違について検証していく。

⑤各学年の授業の進め方

ア) 第4学年では、学級の枠をはずして希望楽器のグループを作り、そのグループごとに楽器製作をしたりリズムづくりを行ったりする。そして学級単位で数種類の異種類楽器群を構成してアンサンブルを行う。イ) 第6学年では、学級主体でグループを作り、楽器製作と音楽づくりの活動を行う。活動の流れは第4学年とほぼ同じであるが、楽器の種類、人数構成は変えるようにする。

その他、検証授業において第4学年では「竹新聞」を作って発表会をもち、第6学年では、「夏休みの課題」について事前に竹や楽器について個人で課題を調べてくることとした。

5 検証授業の概要

<p>第4学年 全12時間 (楽器製作6時間、音楽づくり6時間) ・ねらい「竹楽器を作り、自分たちの音楽を楽しもう」</p>	<p>第6学年 全14時間 (楽器製作6時間、音楽づくり8時間) ・ねらい「響きのある竹楽器を作り、工夫して音楽づくりを楽しもう」</p>
<p>○学習指導計画</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>①東南アジアの竹楽器の学習 → ②竹楽器の製作 → ③同種類の楽器のリズムづくり → ④異種類の楽器による組合せ・音楽づくり → ⑤発表とまとめ</p> </div> <p>○検証授業の概要</p> <p>① 楽器製作の前にトガトンをはじめ竹の楽器について理解させ、素材と楽器との関係、東南アジアの音楽などについて事前学習を行う。【鑑賞】【竹楽器との関わり】</p> <p>② 第4学年では楽器ごと、第6学年では学級ごとに楽器作りを行った。指導体制は図工科教諭、さらに必要に応じて担任とTTで行う。◇4年7種類、6年5種類【手作りによる楽器製作】</p> <p>③ 製作した楽器で、同種類の楽器(同じ楽器同士)でリズムパターンづくりを行う。インターロッキングの手法を取り入れて、竹の楽器の音色や響きを感じ取る活動を行う。【リズムづくり】</p> <p>④ 異なる楽器同士を組み合わせるアンサンブルを行う。東南アジアの音楽の鑑賞をもとに、自分たちで工夫して音楽をつくりあげる。【音色・響きを生かした組合せ、友達とのアンサンブル】</p> <p>⑤ 発表では、各グループで工夫したアンサンブルを互いに発表し合い、竹の響きを感じ取るとともに、竹素材や東南アジアの音楽、竹楽器について学習のまとめを行う。【まとめと発表】</p> <p>その他、「竹新聞のまとめと発表」(第4学年)、「夏休みの課題」(第6学年)など、竹について総合的に研究を行い、子どもたちの主体的な活動を見取る。</p>	

6 検証授業の結果と考察

(1) 竹楽器作り

第4学年で7種類、第6学年で5種類を製作したが、両学年とも竹素材を切ったり削ったりすることが大変で、特に第4学年では「切る」という経験が未熟でその傾向が顕著であった。一方で作った楽器から音が出たときの喜びは、大変大きなものがあった。

第4学年 (トガトン、バリンビン、クロンプト、スリットドラム、レインスティック、サゲイッポ、ギロ)	
第6学年 (竹琴、バリンビン、クロンプト、スリットドラム、サゲイッポ)	以上製作楽器

(2) 楽器の音色と響き—奏法との関連

竹素材の「よい音」とは、「よく響く音」、「持続音が長い音」「柔らかい音」「乾いた明るい音」など素材本来の響きなどであると考え。そのためには加工の仕方、打つ場所の選定、マレットの吟味が大切である。具体的には、素材の固さや長さによって音色や音程が変わるという原理の理解のもと、打つ楽器は手首のスナップをきかせて打ち離すようにしたり、撥の固さは、素材によって固め・普通・柔らかめなど一番よい音が出るものを選んだりするようにした。このようなことから、音に対する感覚が高まり素材のよさを生かすことができた。一方で、加工しても鳴りにくい素材もあり、削り方や切り方、また素材の選定など、今後の課題となった。

(3) 音楽づくり

①同種類楽器の組み合わせ…各学年とも、同種類の楽器でアンサンブルを行った。始めにインターロッキングの手法を取り入れたことにより、比較的スムーズにリズムづくりができた。また音色が同じことから互いの音が聴き取りやすく、リズムパターンを少し変えることでいろいろなパターンを作ることができたが、一方で終わり方などの認識を統一する必要性も感じた。

②異種類楽器の組み合わせ…グループによって楽器の構成に変化をもたせ、音楽づくりにおける変化を見取った。4年では、ア) 核となる楽器を中心とした楽器群<トガトン、スリットドラム>、イ) 奏法によって異なる楽器群、ウ) 均等に配置した楽器群、6年では、ア) 同4年、イ) 均等に配置した楽器群 (9人)、ウ) 同 (6人) という組合せである。

全体的には同じ楽器が多いほど音色の統一感が生まれ、互いに合わせやすく、楽器の種類が多いほど音色に華やかさが感じられる演奏となった。人数の違いでは、多いほど楽器の重なりにより多様な音色と響きが感じられた。一方で話し合いがスムーズにいきにくい面も見られた。

③鑑賞と曲の構成との関連…音楽づくりの前に東南アジアの演奏を聴いたことにより、曲の構成を理解することができた。第4学年では、A-B-A、或いはA-B-Cの3部構成が多く、第6学年ではA-B-Aの3部構成が多かった。第4学年ではAからBへの移り変わりが難しく、互いの拍の感じ取り方が課題となった。なお、CDの演奏を参考にしたグループは約1/3 (6年) で、参考曲が比較的有効であったことが伺える。

(4) 音楽観の拡大

子どもたちの様々な感想から、新たな音楽観の広がりを次の項目でまとめた。

- ・異なる音階…これまでの音楽とは明らかに違う音階で音楽が構成されている。
- ・気候・地域・風土の違い…他の目的で使ったものが次第に楽器となっていく (バリンビンなど)。また、世界の土地独特の気候や地域に合ったものを使って楽器としている。
- ・竹素材の厳密さ…無造作に作られているような楽器でも、厳密にサイズによって音や響きが異なる。
- ・音の出し方…1本の竹でも振り方や叩き方、マレットの工夫などでいろいろな音を出すことができる。

7 研究のまとめと今後の課題

これらの結果と考察から、以下のことが明らかとなった。

- (1) 竹を音素材とした東南アジアの音楽の学習では、表現と鑑賞を関連させた指導、楽器作り・音楽づくりという創造的な活動が、子どもの音楽観の拡大に大きな効果をもたらす。
- (2) 竹を素材とした楽器作りでは、音が出たときの喜び、満足感に大きな成果を得ることができる。
- (3) 竹を素材とした楽器による音楽づくりでは、インターロッキングの手法を取り入れた活動が有効であり、楽器の組合せによって様々な響きの変化を感じ取ることができる。
- (4) これらの活動において最も重要な点は、竹素材の素朴な音、明るい響きなど竹特有の音の響きを感じ取ることである。そのためには楽器の奏法や撥の選定の仕方など、様々な要因が関連していることが分かった。また竹素材のよさも重要な視点であることから、よい音とは、人的物的な相互作用により生まれるものであることが理解できた。

以上のような内容をもって、本研究の成果として結論付けることとした。

なお、課題としては、以下の点が挙げられる。

- 竹楽器の種類を幅を広げたり既存の楽器を加えたりして、多様な形態のアンサンブルによる指導法を確立すること
- 東南アジア諸国を含め、他のアジア圏の諸民族の音楽を学ぶとともに、多様な音源や視聴覚資料などの教材の収集・整備とその活用を行うこと